私の戦争体験

瀬谷区支部　溝口　愛子（子）
戦没者　溝口　孝平
戦没地　青森県

戦後六十五年を迎え、平和で飽食の日本で暮らす毎日であってもあの残酷な戦争を忘れることはない。

一九四五年（昭和二十年）夜半、Ｂ２９の爆撃機の焼夷弾投下により我が家も全焼しました。当時は浜松市鴨江町で祖母と妹、私の三人暮らしでした。

母は昭和十六年五月に他界し、父はその年の十二月に出征しました。そして妹と私が祖母に引き取られて二年、その時私は国民学校の一年生となっていましたが、くる日も来る日も警戒警報発令の中を防空頭巾をかぶっての登校！

しかし途中で空襲警報となって防空壕へ逃げ込む破目となり、勉強など出来る筈もなく恐ろしい思いばかりでした。

時には低空飛行で襲い掛かる米軍の艦載機に狙われて、木の下や土手に伏せたりしたこと幾度もあり、寝る時も着のみ着のまま（衣服のまま）布団に入る毎日でした。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

昭和二十年のその夜も浜松市は大空襲の被害に遭いました。雨のように降りかかる焼夷弾であっと言う間に街は火の海、大勢の人が逃げ惑い、私達三人も離ればなれにならないよう、どこをどのように走ったのか分からないまま逃げました。

我が家の近くに裁判所と無線電信基地があり、そちらの方向に逃げたようですが、年寄りと子供達だったので逃げ場を失い右往左往している時、丁度兵隊さんらしき人に助けられ大きな防空壕へ押し込まれました。

空も街もあたり一面真っ赤に染まり、子供心にも唯々恐ろしくてガタガタ震えていたことを今でも覚えています。

朝方になり一面の焼け野原と焦げ臭い中を焼け落ちた我が家に向かうと、日蓮宗のお寺の住職をしていた伯父が心配して探しに来てくれ、寺島町にあるお寺の方に移るよう促してくれました。

しかし、お寺に行ってみると本堂も庫裏も爆風で被害を受けており、防空壕が一番安全な場所ということで防空壕の中の生活が始まりました。

防空壕の中には日蓮大菩薩のお像もご一緒で、狭いながらも安心できる場所でしたが、雨が降るとスノコの下の水が増して、水を外に出す作業も手伝いました。

戦いも増々厳しさを増す中、艦砲射撃のあった夜には約一時間半の間、防空壕がゆりかごのように揺れ、ヒュ～ヒュ～と不気味な音のする中で伯父と祖母が今夜が最後になるかもしれないと話しており、伯父と一緒に南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経とお題目を唱えながら朝を迎えたことを鮮明に記憶しています。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

明け方、静かになって壕のフタを持ち上げてみると、まわりは破片だらけであたりに家は見当たらず、大きなスリバチ状の穴が見えました。

お寺も庫裏は吹き飛ばされ、本堂だけがポツンと残っていました。その本堂も軍艦からの艦砲射撃の破片が柱に、畳に、壁にと無数突き刺さっていました。

その日からお寺の境内には焼け爛れた死体が次々と運ばれ、鼻をつく異臭と悲惨な光景に眠れず、食べられない状態が何日も続いたことを思い出します。

父も終戦の年二十年七月十五日に戦傷死、祖母も昭和二十一年七月十五日に他界して私と妹は戦争遺児となり、私と妹はそれぞれ別の人に育てられ数十年後にやっと再会することが出来ましたが、多難な戦後をたどる戦争犠牲者となってしまいました。

こんな私達よりもっとつらい体験をお持ちの方々が大勢おられると思いますが、戦争だけは絶対にやってはいけません。戦争は人の命を奪うだけでなく、残った人々の人生までも不幸にしてしまいます。そしてそのようにしないため、させないためにも、このような体験を次の世代に語り継ぐことが大切ではないでしょうか。

©2011_財団法人神奈川県遺族会